

屋売
國販
伊籍
紀書

金の星社、白百合女子大と協働

学生が児童書フェアを企画

紀伊國屋書籍販売、金「ぐ協働プロジェクト」は、の星社、白百合女子大学 書店と出版社と大学が本による「読書文化をつな」を介して、読者や地域を



書店員と学生が意見交換

第1弾として、同大の児童文化学科3年生10人が、紀伊國屋書店仙川店（東京・調布市）で秋に「児童書フェア」を開催するべく、

準備を進めている。

大学で学んだ絵本や児童文学の専門的な知識を、選書や売場づくりといった「実践」に活かして、店頭の盛り上げを図る。仙川店はキャンパスの最寄り書店であり、学生は売場に出向き、売れ筋商品の確認や什器の採寸などをし、店の特性と設えを精査。フェアの方針を検討中で、フリーペーパー制作や広報にも挑戦する。

紀伊國屋書籍販売の榎谷大地取締役は「地域連携」は自社の大きな目標で、仙川店が施策の中心的役割を担うことは「大変光栄」と笑顔をみせる。プロジェクトは同大の水間千恵教授が受け持つ授業の一環として行う。2社は節目ごとに授業に参加している。7月1日には、学生と紀伊國屋書籍販売による意見交換がなされた。

本棚制作の新たなアイデア、既存什器を用いた売場づくりを提案した。売場づくりでは小型の棚を集めて組み合わせ、木を模したPOPなどでテーマを表現。棚の一部を覆って本を隠し、それを来店客が覗き穴から見る仕掛けも企画した。紀伊國屋書籍販売店売事業部の岡田正継氏は、「本屋での体験」を生む工夫として覗き穴を高く評価し、「我々になかった発想。絶対やった方がいい」と述べた。同部の安藤大樹氏、仙川店の福田まきと店長が実現性や安全面に関しての留意点を伝え、学生と改善策を練った。

このプロジェクトは、金の星社の声掛けで誕生。販売部の花ヶ前盛武氏は「自由な発想で本を届ける方法を考えたい」との思いで、児童文学に造詣が深い白百合女子大学と、地域連携に注力する紀伊國屋書籍販売へ打

診した。金の星社はプロジェクトでの「新刊共同プロモーション」も構想中であり、「学生が発売前の作品を読み、読者への提案方法を作家と考える。そんな取組みができれば」と話す。

